

「食べる」と「飲む」を伴う会話場面の身振り分析

－会話と飲食を調節する〈アイドリング〉動作に着目して－

尾賀円香（立命館大学学部生）・赤井里奈（元立命館大学学部生）・岡本雅史（立命館大学）

1. はじめに

我々は飲食を伴う会話場面において、会話に従事しながらも食事や飲料を摂取するというマルチタスクをこなしている。一つしかない口で、飲食という個人活動と会話という相互行為活動をなせ調節することができるのであろうか。この点について食事場面について調査した研究は多くあるが、飲料摂取場面を取り上げた研究は少ない。食事と飲料では達成すべきタスクの大きさや、「咀嚼」か「嚥下」かという行為の違いがあるため、会話を調節させるために生起する動作にも異なる動きが見られると考えられる。そこで本研究では、会話と摂取の二つの活動の間に起こる一見すると冗長や無駄に見える動きのことを「アイドリング」と定義し、このタイプ分類に基づいて、複数人での食事場面（共食場面）と飲料摂取場面（喫茶場面）を比較し、各場面でのどのように会話活動と調節しながら摂取行動を行っているのかを解明する。

2. 関連研究

徳永ら (2014) は3人での共食会話場面を取り上げ、聞き手は話し手の発話の直接の受け手になる場合、自分の応答後に隣接させて摂食をすることが多く、逆に直接の発話の受け手ではないなどの会話関与の度合いが低い場合には、もう一人の聞き手の応答を利用して摂食したり、応答のない場面でも摂食するケースが多いことを示した。井上ら (2011) は、食事時は非食事時に比べて参加者間での会話の偏りが減少すること（会話の平準化現象）を明らかにした。Den & Kowaki (2012) はジェスチャー単位を用いて食事動作を体系的に記述し、参加者は会話をしている間、口元までご飯やおかずを持って行った状態で保持し、保持区間に発話を行い、発話終了後にすぐに口に入れることで保持区間を有効活用し、食事と談話の2つのタスクを両立させていたことを指摘した。阿部 (2018) は、ペットボトルの飲み物を飲みながら会話を行う3人組の会話を分析し、飲み物を「飲む」行為は、自身は話し手ではないという参与役割を明確に示すはたらきがあり、また、話し手であっても発話をしない言い訳をつくることができる行為であることを指摘した。

3. 研究目的と分析手法

食事が会話に及ぼす影響や摂取の調節の仕方、食事と飲料のそれぞれの摂取タイミングに触れた研究は従来多くなされているが、飲食摂取時の動作の淀みや中断等に焦点を当てて分析した研究は少ない。よって本研究では会話と摂取の二つの活動の間に起こる、一見すると冗長や無駄に見える動きのことを「アイドリング」と定義し、アイドリングのタイプ分類を行い、これに着目して複数人での食事場面（以下、共食場面）と飲料摂取場面（以下、喫茶場面）を比較し、それぞれの場面で、どのように会話活動と調節しながら摂取しているのかを解明することを目的とする。まず、アイドリング動作を観察するにあたり、ジェスチャー単位の観点から飲食摂取動作をELANによってアノテーションを行う。

Kendon (1980; 2004) はジェスチャーを行うときの一連の動作のまとまりを「ジェスチャー単位 gesture unit」と呼んでいる。ジェスチャー単位の内部は「準備 preparation (P)」, 「ホールド hold (H)」, 「ストローク stroke (S)」, 「復帰 recovery (R)」という「フェーズ gesture phase」に大別される。ジェスチャーが行われないとき、私たちの腕は休止位置にあるが、この位置を「レストポジション rest position」と呼ぶ。レストポジションの位置は楽な姿勢を全て指すので様々であるが（細馬・菊地, 2019）、今回は共食場面と喫茶場面の両者で定義づけを行う。

まず、両方の場面に共通して、お箸やコッ

表1：飲食摂取動作の流れ

ジェスチャー句	動作区間	ジェスチャー転記例
【食】箸を手取る 【飲】コップ/スプーンを持つ	【食】何も持っていない手が動き始めて箸に触れるまで 【飲】何も持っていない手がコップやスプーンに触れるまで	レストから箸やコップに向かって手が動く (P) → 箸やコップをつかむ (S)
【食】箸を持つ/保持する 【飲】コップ/スプーンを保持する	【食】箸に触れてから箸を握っている状態 【飲】コップに触れてコップをテーブルに置いたまま、または空中で保持する/スプーンに触れて、スプーンを保持する	【食】箸を握る (P) → 箸を握っている状態 (H) 【飲】コップをテーブルから離して空中に持っていく (P) → 空中で保持 (H)
【食】食事を箸でつかむ 【飲】スプーンですくう (スプーンを使用する場合のみ)	【食】箸が食べ物に向かい、食べ物をつかむまで 【飲】スプーンがコップの中の飲料に向かい、それをすくうまで	箸・スプーンが食べ物・飲料に向かう (P) → 食べ物をつかむ・スプーンですくう (S) → つかんだ状態で静止・すくった状態で静止 (H)
口に入れる	【食】持っている食べ物を口まで運び、口に入れ離れるまで 【飲】コップ/スプーンを口まで運び、口に入れ離れるまで	口に食べ物・コップを運ぼうとする (P) → 途中で静止 (H) → 口に食べ物・コップを運ぶ (P) → 口に入れる (S) → 箸・コップが口から離れて箸をテーブルに置く (R)

プなどを持ったままの状態テーブルに手や腕の一部を預けてリラックスしている状態を「レストポジション (RP)」と呼ぶこととする。一方、お箸やコップなどから完全に手を離してリラックスしている状態を「ホームポジション (HP)」として区別すると、共食場面では RP にある時間が長いのにに対し、喫茶場面では HP の方が多く見られるため、飲食摂取動作のセグメンテーションを行う際に、共食場面では主に RP を起点・終点と考え、喫茶場面では主に HP を起点・終点とみなすこととする。そして、飲食摂取と関係のない動作は「その他の動作」として転記する。アノテーションをする際に、左右の手をそれぞれ分けて付けるのではなく、主に飲食摂取動作に関与している手を優先させて行う。

これらを転記した後、次に飲食動作の一連の流れのどの段階の動きなのかを、Den & Kowaki (2012) の提案するタイプ別に分けて転記を行う。Den & Kowaki (2012: 31-32) はジェスチャー単位を用いて食事動作の一連の流れを、「箸やスプーンを手にする (Picking-up)」、「箸やスプーンを持つ・保持する (Holding)」、「食事を箸でつかむ/スプーンをスプーンですくう (Catching)」、「口に入れる (Taking-in)」の 4 つのタイプに分類しており、これら 4 つのタイプはそれぞれジェスチャー句 (gesture phrase) に相当する。この分類方法に倣い、共食場面と喫茶場面の動作の流れを合わせたものを表 1 に示す。

最後に、ジェスチャーフェーズや摂取動作の流れに基づいてラベリングしたものを参考に、飲食摂取動作中の無駄や冗長と考えられる動きを「アイドリング」としてアノテーションし、タイプ分類を行う。アイドリングは「会話」が「飲食」に影響を与えて生じる動作であり、ジェスチャーフェーズと同じ区間で発生するものや、ジェスチャーフェーズをまたぐものも存在する。

4. 分析データ

分析データとして、筆者らが収録した 4 グループの共食場面 (AK_001~AK_004) と 1 グループの喫茶場面 (OT_001) の音声・映像データと、『日本語日常会話コーパス』モニター版 (小磯ら, 2019) から抽出した 1 グループの共食場面 (K003_012) と 2 グループの喫茶場面 (K001_003, C001_001) の音声・映像データと ELAN データを用いた。各データの参加者数は、それぞれ 5 名 (C001_001), 4 名 (AK_001, 002), 3 名 (AK_003, K001_003), 2 名 (AK_004, OT_001, K003_012) で、男女構成比は AK_001 と AK_002 のみ男女 2 名ずつで、その他は全員女性である。また、全て自宅での飲食ではなく外食場面である。

5. 分析結果と考察

5.1 アイドリングのタイプ分類と機能的特徴

データ分析の結果、「アイドリング」は、「静止型」、「手遊び型」、「淀み型」、「ためらい型」、「中断型」の 5 タイプに分類することができた。以下、各アイドリングの機能的特徴について詳述する。

5.1.1 静止型

次の動作に入る直前に見られる、動作を一時静止させるタイプのアイドリングである。話し手の静止型アイドリングに着目したところ、思考や想起を必要とする発話時や自分が主張したい発話内容の場合にこのアイドリングが生じる傾向にあった。その他、口に入れる直前まで発話し続けている場合は、摂取する寸前の

発話 (話し手)	でもさ見ててさ 5回で中止になるよりかはさ		先に中止になってくれてよかったかも	
発話 (受け手)				うーん
アイドリング (話し手)			静止型	
ジェスチャーフェーズ (話し手)	S	S	H (I)	P
動き (話し手)	箸で蓮華の上の小籠包の汁出す	箸を小籠包から離す	箸と蓮華を空中で保持	口に小籠包向かう
ジェスチャー句 (話し手)	食事を箸でつかむ			口に入れる
アイドリング (受け手)				
ジェスチャーフェーズ (受け手)	R	RP		
動き (受け手)	口から箸を離す	咀嚼中であり、箸を持ちながらレストポジション		
ジェスチャー句 (受け手)				

図 1: 共食場面 (K003_012, 04:15.11-04:20.17)

ところで静止型アイドリングを利用してから発話が行われることもあった (図 1)。一方、受け手の動作に着目すると、相槌を打つためにこのアイドリングを使用している場面があった。静止型アイドリングを利用することで、摂取と相槌が重なりそうになる場面でも上手くズレをつくることができ、会話と摂取を両立させることができていた。また、受け手の場合、相手の発話内容に対し興味・関心を持ったときや驚いたとき、相手の発話が聞き取れなかったときに静止型アイドリングが生じていた。このように「聞き手性 listenership」を示すという意味でも有効にこのタイプのアイドリングを活用していることが確認された。

5.1.2 手遊び型

手遊び型とは同じ動作を繰り返す行い、本来の目的ではない動作に時間を費やすアイドリングのことである。話し手の場合、自身の言いたいことや話のオチがついて終了したとき、相手に問いかけをして返事を求める発言後の部分でこのアイドリングが生じた。これは、「ターン構成単位 (turn construction unit: TCU)¹」の終結部に生じたものであると言える。この TCU 完結部で手遊び型アイドリングをすることで、自身のターン終了の合図をし、相手にターンを譲渡することを可能にしていると考えられる。また、自身の発話と発話の間を埋めるようにしてこのアイドリングが活用されることもあり、これは「え

¹ TCU とは Sacks ら (1974) が提唱した「順番を構成する単位」のことを指し、文、節、句、単語などの様々な単位タイプから成る。話し手は話し出すとともにこの単位を用いて少なくとも一つの単位が終了するまで話す権限を持つ。順番の終了場所を予測することを可能にするまともであり、発話末要素の出現したところが TCU の切れ目となる。

つと」などのようなフィラーのような機能を果たしていたと考えられる（図2）。本来のフィラーは言葉で発話の間を埋めるため、長さには限界があるが、手遊び型アイドリングであれば、言葉で間を埋めるよりも違和感なく長く沈黙を埋めることが可能である。その他には、二つの活動と同時にを行うことで会話に神経が使われ飲食動作がおろそかになったとき、発話できるタイミングを見計っているとき、口に含まれている食べ物がある程度なくなるのを待っている間、などに生じていた。他のアイドリングタイプに比して最も摂取目的を伴わない動きであり、新しい話題をするときなどに話にエンジンをかけるように用いられることもあった。

5.1.3 淀み型

淀み型とは、通常のスピードよりもゆっくりと動作を行う動きを指す。淀み型が生じるタイミングは、共食場面と喫茶場面で共通して、摂取直前が多かった。このアイドリングは会話にも意識が行きつつ、飲食動作という作業にも半分意識があるような状態のときに生じる。例えば、食事動作をしながら自分の伝えたいことが言い終わるまでの間や相手に視線を向けて発話をする場合に生じやすいことがわかった（図3）。食べ物や飲料をゆっくりと口元に近づけ、相槌や応答が終わった後にすぐに摂取している場面も見られ、淀み型アイドリングを用いて発話と摂取の時間調節をすることで、効率的な飲食摂取が可能となっていることが示された。また、受け手は、話し手の発話途中であればそれを遮らないように、淀み型アイドリングを利用して目立たないように相手の話速に合わせるようなスピードで動作を行い、相手の発話の邪魔にならないように配慮することが可能となっていた。特に共食場面の場合、この淀み型で会話と摂取を調節することが多く、それは飲料摂取に比べてタスクが多く、会話と同時進行で食事動作を進めた結果、話速と合わせたスピードになることが多いからであると考えられる。

5.1.4 ためらい型

ためらい型とは、飲食動作をするか話すかのどちらにするかをためらって、箸やコップが上下に行きつ戻りつするアイドリングのことである。ためらい型アイドリングはストロークやホールドなどの多くのフェーズを含み、長時間に渡るアイドリングになる場合もある。摂取の準備をしたが話し手の話が急に終わりを迎えて応答をしなければならない場合や、話がもうすぐ終わると思い応答の準備をしていたが、また続くことが明らかになった場合に生起する（図4）。受け手はTCUの完結部を常に予測して話を聞いているが、この予測が失敗した場合に、その失敗を修正するためにためらい型アイドリングが用いられており、相手の発話内容や発話タイミングに大きく影響されて生じると考えられる。

5.1.5 中断型

中断型とは目的の動作が最後まで達成されず、動作の途中で前の段階の位置に引き戻すアイドリングを指す。喫茶場面を例に挙げると、飲み物を飲もうとした際に、話し手が発した言葉が初めて耳にした言葉だったため、驚いて「何それ」と聞くために口からコップを離して中断する場面があった（図5）。また、飲料摂取をしている最中に話し手の会話が突然終わった場合に応答をするために飲む行為を中断することもあった。このように中断型は動作を開始した直後の発話内容に影響を受けた時に生じる。

発話（話し手）	で入院するやん	んで	その入院した次の日が
発話（受け手）			
アイドリング（話し手）	手遊び型	静止	手遊び型
ジェスチャーフェーズ（話し手）	S (I)	H (I)	S (I)
動き（話し手）	混ぜる	スプーン保持	混ぜる
ジェスチャー句（話し手）		スプーンですくう	
アイドリング（受け手）			
ジェスチャーフェーズ（受け手）		HP	
動き（受け手）		手を触るしぐさ	
ジェスチャー句（受け手）			

図2：喫茶場面の手遊び型アイドリング (OT_001, 06:45.72-06:50.00)

発話（話し手）	え、めっちゃ久しぶりやないですか		
発話（受け手）		うーん	やばい (笑い)
アイドリング（話し手）			
ジェスチャーフェーズ（話し手）		その他の動作	
動き（話し手）			
ジェスチャー句（話し手）			
アイドリング（受け手）		淀み型	
ジェスチャーフェーズ（受け手）	P	S (I)	S
動き（受け手）	箸でつかみにいく	小籠包を箸でつかんで蓮華にのせる	自分の近くに持っていく
ジェスチャー句（受け手）		食事を箸でつかむ	

図3：共食場面の淀み型アイドリング (K003_012, 00:12.94-00:16.87)

発話（話し手）	ここが痛いねんみぞおち	ここが痛くて	なんか
発話（受け手）		うわ	
アイドリング（話し手）		静止型	
ジェスチャーフェーズ（話し手）		H (I)	
動き（話し手）		スプーンを保持する	
ジェスチャー句（話し手）		コップ/スプーンを保持する	
アイドリング（受け手）		ためらい型	
ジェスチャーフェーズ（受け手）	H	S (I)	P (I)
動き（受け手）	口元で冷ます	テーブルに置くこととする	口に運ぶ
ジェスチャー句（受け手）		口に入れる	

図4：喫茶場面のためらい型アイドリング (OT_001, 01:04.23-01:08.33)

発話（話し手）	先生曰く横行結腸やわーみたいな	んふふ	
発話（受け手）		何それ	
アイドリング（話し手）			
ジェスチャーフェーズ（話し手）		RP	
動き（話し手）		スプーンを保持する	
ジェスチャー句（話し手）		コップ/スプーンを保持する	
アイドリング（受け手）		中断型	静止型
ジェスチャーフェーズ（受け手）	H	S (I)	H (I)
動き（受け手）	冷ますために口の手前で静止	口から離す	コップを保持
ジェスチャー句（受け手）		口に入れる	コップ/スプーンを保持する

図5：喫茶場面の中断型アイドリング (OT_001, 01:08.84-01:12.06)

5.2 考察：共食場面と喫茶場面の比較から

5.2.1 場面による相違点

共食場面と喫茶場面のアイドリングを比較すると、会話中における生起タイミングはほとんど同じであった。しかし、共食場面ではタスクの多さから、常に食事に意識を向けなければならないという制約があるため、会話と摂取のどちらにも意識を向けることで生じる淀み型が多く見られるという違いがあった。また、共食場面の場合、咀嚼に時間を掛ける必要があるため、その咀嚼の間に手遊び型アイドリングや淀み型アイドリングなどの動きが見られるが、喫茶場面の場合は咀嚼がないため、摂取後に間を持たせるためのアイドリングは共食場面と比較してあまり見られなかった。さらに、中断型については、3節で述べたように、共食の場合は箸を持ったままレストする RP に戻ることがほとんどであるのに対し、喫茶場面ではコップから手を完全に離す HP に復帰することが多かったことも大きな違いである。このように共食場面と喫茶場面では飲食タスクの大きさの違いと咀嚼の有無、道具使用の様態等が、アイドリングの違いを生み出していると考えられる。

5.2.2 参与役割との関係

両場面で共通して言えることであるが、話し手は思考や想起を伴う場合、静止型アイドリングを利用し、発話と発話の間に埋める方法として手遊び型アイドリングを活用していた。また、受け手は相槌や質問、聞く姿勢を示すときに静止型アイドリングを使用していた。残り3つのタイプのアイドリングは、相手の発話ペースに合わせた結果生じたケースや、会話が予測していたものと違う展開となった場合に、軌道修正をして時間調節をするために生起していた。両場面でのアイドリングの相違について観察すると、共食場面の場合、話し手は発話をしながら静止型や淀み型を使用して摂取を行い、受け手は聞き手性を示す場合や反応を示す必要がある場合に静止型や中断型、ためらい型を使用していた。一方、喫茶場面では摂取直前に発話権を突如取得した場合に静止型、ためらい型、中断型が生じることが多かった。したがって、共食と喫茶の場面の違いに加えて、話し手と受け手といった会話の参与役割の違いによっても、どのアイドリングのタイプが会話活動と摂取行動を効果的に調節するために選択されるかが異なると言える。

5.2.3 発話の非流暢性との共通性

発話の非流暢性に、語末音を延長する「延伸」や、感動詞等で挿入される「フィラー」、そして無音の「間」があるように、動作の非流暢性を示すアイドリングにも、「延伸」に相当する「淀み型」や「ためらい型」、「フィラー」に相当する「手遊び型」、そして「間」に相当する「静止型」などのタイプが存在していたのは興味深い点である。これらは一見無用で冗長な要素に見えるが、話題の初めの前置きとしてや、話し手が話の途中で次に発する言葉を考えるための休止符、受け手にとっては話の理解を深めるための時間にもなり得ると考えられる。したがって、飲食を伴う会話におけるアイドリングは、フィラー等の非流暢的な要素と同様に、参与者にとって会話を円滑に進める上で不可欠なものであると言えよう。

6. おわりに～今後の課題

分析の結果、アイドリングは会話と摂取という複数の活動を円滑に進行させるために発話と動作の時間調節を果たすことで、共食・喫茶場面での動的な状況の変化に柔軟に対応する手助けをしていることが示唆された。本研究では、主に質的な分析を行ったが、具体的な共食／喫茶場面の相違点をさらに明らかにするためには、アイドリングの生起頻度や発話時間長などを定量的に示す必要があるだろう。また、発話の受け手と傍参与者の振る舞いの違いや、相手に視線を向けることで動作に淀みが生じる現象も観察されたため、参与人数や視線はアイドリング動作に大きく影響する可能性があると考えられる。よって多人数での参与役割や視線についても今後考慮して、よりマルチモーダルな分析を行っていきたい。

謝辞 本稿の執筆にあたって千葉大学の伝康晴氏から有益なコメントを頂きました。著者一同ここに感謝いたします。

参考文献

- 阿部廣二・牧野遼作・門田圭祐・山本敦・古山宣洋 (2018). いつなら飲んでも良い？雑談場面における“飲むこと”の相互行為的調整 日本認知科学会第35回大会発表論文集, 685-694.
- Den, Y., & Kowaki, T. (2012). Annotation and preliminary analysis of eating activity in multi-party table talk, *Proceedings of the 8th Workshop on Multimodal Corpora: How Should Multimodal Corpora Deal with the Situation?*, Istanbul, 30-33.
- 細馬宏通・菊池浩平(編). (2019). ELAN 入門, ひつじ書房.
- 井上智雄・大武美香. (2011). 多人数会話における食事の有無の影響：会話行動の平準化 ヒューマンインタフェース学会論文誌, 13(3), 195-205.
- Kendon, A. (1980). Gesture and speech: Two aspects of the process of utterance. In Mary R. Key (ed.), *Nonverbal communication and language*, 207-227. The Hague: Mouton.
- Kendon, A. (2004). *Gesture*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居関友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2019). 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴 言語処理学会第25回年次大会発表論文集, 367-370.
- Sacks, H., Schegloff, E., & Jefferson, G. (1974). A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation, *Language*, 50, 696-735.
- 徳永弘子・武川直樹・木村敦 (2014). 共食会話における協力的なコミュニケーション行動形成の仕組み：聞き手はいつ食べ、いつ応答するのか 知能と情報 (日本知識情報ファジィ学会誌), 26(4), 793-801.